



Title	伊藤久秋教授著 『マルサス人口論の研究』
Author(s)	寺川, 末治郎
Citation	商業と経済, 9(2), pp.195-203; 1929
Issue Date	1929-03-10
URL	http://hdl.handle.net/10069/26906
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-28T18:18:11Z

新刊紹介

伊藤久秋教授著

『マルサス人口論の研究』

(丸善發行 定價參圓參拾錢)

寺川末治郎

(一) 由來經濟學上マルサス人口論の取扱は必ずしも固定せるものでない。例ばミルの原論を繙くとき人口論は、生産論に於て説明せられてゐるに氣づくであらう。蓋し働く手を提供するときみる限り人口は根原的の生産要素である。然に人口は働く手を提供すると同時に否、それ以前からして食ふ可き口の保持者である。此の口としての人口に重點を置く學者は人口論(マルサスの)に消費論中の一地位を許容する。山崎博士の原論では確にそうなつてゐたと思ふ。近代の風潮は消費論に多くの頁を興へる事を惜む。慾望は經濟學の出發點を提供するのみ。一方塊國學派の流布によ

る生産論の閑却は遂に人口論及それに關係するマルサスの名を全く掲げざる經濟原論の出現に導いたのである。茲にも捨てる神と拾ふ神とは別人格となつて、原論から姿を消した人口論は社會問題、社會政策に拾はれた。人口論がマルサスの範圍を一步も出ぬならば理想も政策も兒戯に類する筈である。かくて人口論に對する態度は再び *lebhate* な問題となつた。殊に社會政策の嚮導理念を生存權に求めんとする人達は、先づマルサス人口論を何等かの形式に於て克服するの必要に迫られた。個人の倫理觀に訴へるか、人性の可塑性を高調するか、或は人口法則の作用する間に尙ほ生存權を容れ得る廣大なる餘地の存在を指摘するか、或は單純に産兒制限を云々するかして。カウツキー、ゾンバルト、安部、福田などの顔が浮ぶ。然に既に原論體系より脱退したマルサス人口論は限界生産力派の分配賃銀論に其姿をあらはして來る。賃銀は限界生産力の大小に比例するならば、限界生産力の大

小は勞働單位數の大小に反比例する。而して單位數の大小乃至増減は如何にして起るかの問題は一應マルサス人口論に聽くことになつたのである。シユンピーターが最も秀れたる賃銀論と爲せるカーヅアー分配論の賃銀が其の例であらう。即生産論から分配論への移動となつて、此の新しき基金説とも言ひ得るやうな形式はあまりにマルサスへの復歸をはめかす。更に轉じては最近に於ける流行たる方法的(シユトレラーの意味の)靜態動態論は、靜態にありては凡ゆる與件の變動を象するが故に最早や賃銀論に、人口論(マルサスなると否かを問はず)を置くの意味なからしめ、同時に、人口増加を以て發展の主要素動態原因者として、重要な地位を與へる事になつた。クラークに於て人口増加は勞働單位の増加と欲望の増加とをや、偶然的に包括する。言はゞ生産と消費の兩方面に對する人口の意味は特別な形式に於て結ばれたと解し度い。私は經濟學上人口論の取扱の變化を

大略右の如く考へてゐる。今問題を率いて此處まで來ると其範圍の見當がつくやうである。換言すれば人口論をマルサスの承認するか、はた然らざるかに依つて爾後の思索發展に重大なる區別が起る。何んとなれば動態原因の人口論をマルサ的にみるならば利子利潤を永遠化する事になり、所謂論理的範疇としての利子利潤を是認せねばならない。若し又非マルサ的に解するならば吾人の眼前の異常なる人口増加は資本主義時代の特産物に過ぎない。かくして人口増加による發展は論理的たらず、引いて歴史的範疇としての利子利潤を言ふに止まる。何れの見解を採るやは單に個人の興味に追隨するのみにてはあまりに悲しい。私は原論體系構成の上からも著者伊藤教授と共に「マルサス人口論全體に關する解説はなほ要求せらるゝこと大なりと信する」ものである。然り從來とて「マルサスの名は頻に人の口頭のぼる。しかしそれは磨滅したる通貨の轉々流通せる如きものでなか

らうか」白狀すれば私のマルサスも著者によつて啓蒙を授けらる今日までは、磨滅せる通貨を受授してゐたに過ぎないのを覺つた。之改まつて著者に感謝せねばならぬ點である。

(二)順序として本書の主張せんとする目的をかかねばならぬ。曰く「著者は本書に於て人口論の系統的批評を企てんとするものではない。」かゝる企ては「今後の業作に譲る」と言はる。従つてその目的とする所は巨大なる「マルサス人口論を主として其の時代の反映に於て見むとする所にある。それが爲めに本書の内容は人口論の解釋と當時の反響の觀察とに二分される。マルサス人口論に對する批評はその目的とする所ではない。併し解釋は既に或程度に於て問題の批評である限り、又批評家の批評を取扱ふに當つて必要な限り、著者自身の批評が隨所に現はれ來つたのはやむを得ない」。第一篇の「マルサス人口論の成立と其の内容」は解釋の部にあたり、第二篇「マルサス人口論の反響」は當時の反響

を觀るものであるは勿論である。私は此本を讀む時、たえず座右に置くことにしてゐた、Bonar, Malthus and His Work, 1924. の目次と本書のそれとを比較しやう。尤も前者の觀察は人口論以外の著者にも及ぶのであるが。

本書

第一編 マルサス人口論の成立と其の内容

第一章 序 説

第二章 人口論執筆の動機と第一版の主題

第三章 人口論第二版

第四章 マルサスの主題

第五章 人口法則の作用

第一節 序 説

第二節 下等民族に於ける人口の抑制

第三節 往昔の北歐人に於ける人口の抑制

第四節 近代牧畜民に於ける人口の抑制

第五節 支那及日本に於ける人口の抑制

第六節 古代希臘及羅馬に於ける人口の抑制

第七節 諾威、瑞典及露西亞に於ける人口の抑制

第八節 中歐、瑞典、佛蘭西に於ける人口の抑制

第九節 英蘭蘇格蘭及び愛蘭に於ける人口の抑制

第六章 平等社會の批評——ゴッドウイン其他

第七章 移民に關するマルサスの見解

第八章 救貧法——生存權否定に就て

第九章 農業立國か商工立國か並に穀物條例に關する

マルサスの見解

第十章 國富の増加と貧弱の狀態

第十一章 道徳的抑制に就て

第二編 マルサス人口論の反響

第一章 マルサスのポピュラリティー

第二章 マルサスの批評家

第一節 人口法則を認めざる者

第二節 人口法則よりマルサスの導く結論を認めざるもの

第三節 宗教的又は感情的反對者並に立場明かならざる批評家

結語

附篇

一 トマス・ロバート・マルサスの略傳

二 マルサスの父ミルソー及びヒュームとの關係

三 マルサス及び人口論爭關係年表

人名索引

Bonar

introduction

Book I. The Essay.

chap. I. First Thoughts, 1798

" II. Second Thoughts, 1803

" III. Theses

" IV. The Savage, Barbarian, and Oriental

" V. North and Mid Europe

" VI. France

" VII. England, Scotland and Ireland

Book II. Economics

chap. I. The Landlords

" II. The Working man

" III. General Gluts

" IV. The Beggar

Book III. Moral and Political Philosophy

" IV. The Critics

" V. Biography

Index

第一篇の初の部の進み方は著者が dedicate してをられるボナーに據つてゐる事は察せられる。更に同篇の第六章より第十章に説く所はマルサス原本の第三篇に該當するものにして、原本から摘録するに第一章より第三章は平等主義論、第四章は移民論。第五章より第七章は救貧法。第八章農業主義。第九章商業

主義。第十章農商並行主義。第十一章と第十二章穀物法。第十三章富の分配が貧民の境遇に及ぼす影響に就て。とある。ポナーに在つては第二篇經濟學の四章の間に散在するもの。而して著者が第一篇の第十一章に要約せられしものは、マルサス原本第四篇の十四章に互る廣汎なる思想である。

次に第二篇第一章はマルサス當時彼の說に賛成する人々の思想。第二章は三分せられて第一章よりは詳細に、マルサス反對者の聲が寫されてゐる。何故第一章をも第二章の如くその賛成者を多少科學的な立場から分類を加へなかつたかに就いては別段著者の言葉がなはいやうであるが、既に第一篇にマルサスの思想が述べてある以上、それに同する思想に多くの頁を割くことは同一の事柄を反復するの弊を恐れたからであらうが著者の *Interesse* の置き所の問題でもあらう。第一篇と第二篇を比較するに前篇に於ては形式的にポナーに學ぶ所多く後篇に於て甚だ尠い。寧ろ無いと言

ふべきである。結語に到つて再びポナーに接近する如くなるもそうではない。附篇の各章は體彩の事情から附篇となつてゐるが、マルサスを理解する爲めには重要な地位を占めるものであり又手ぎはよく書かれてゐる。碑銘の訂正は周到なる用意に基づくもので著者の勞を多とせねばならぬ。

(三)私は想像する。恐らく伊藤教授は此の研究にあたり先づポナーを讀んで其詳細を自己のものどせられたのであらう。マルサスに對する興味もポナーから得られたので無らうか。これ著者として甚だ賢明な道を進まれたわけである。凡て古典と仰がれる程の大著を研究するに、卒然とそれに突進するは、多く大膽なるに似て其實益は乏し。事實古典には種々の解説又は、批評といったものが存在するのであるから、後學の士はその中に相當信賴すべきを選んで、一つの *Orientierung* を得るのであるし、それを土臺として更に進展をはかることも出來やう。かゝる土臺を得てを

くことは或種研究にとつては絶對的に必要である。唯難解ならば考を深くする事によつて克服の途があるが、マルサスの如く *Yaldeninge* なるものは深く考へるのみにては方向の正誤は保證されない。多くの點に於てボナーは著者に研究發端の立場を授けたのであらう。殊に本書は記念すべき處女作である限り餘程慎重な態度をこられたのであらう。「有益なる助言を與へられたるゼームスボナー博士に對し當時の約束に従つて、本書の壹部を贈呈し得る機會に接したるを喜ばれる著者の心中察するに難くない。然し本書に發表する思想は單なるボナーの反復でなくて多くの場所に於て彼の失慮、短見を補正する。その時も直線的にアゲ足取りに出でずして、一途にヨリ高き完成を目ざして、おだやかに論歩を進める如きは著者の人格の然らしめる所であり、學究の態度として誠に嬉しい。引照の該博なるは言ふまでもなくボナーの及ばざりし獨逸文獻、彼に洩れた英佛の研究も勞力を惜まず吟味せられ

てゐる。しかも之等各國の引用が甚だ整然均勢である上に、著者一流の齒切よい文體は讀過の際唯爽快を覺えしめるのみである。いかにも學問的な勞作と言はねばならぬ。殊に第一篇は著者の最大の苦心の宿る所であらうが其苦心は十分に報ひられてゐる。學說史研究として最も尊重すべきものたるを失はぬ。曾て世に顯はれざりし多數の批評家が紹介せられてゐるのも本篇である。尤もマルサス研究では引證の過多は却つて禍をなす事もあらうが價値あるものゝ脱漏は防がねばなるまい、唯私は兩篇の内容を十分正當に *Widlegen* するだけの力を缺くので著者は元より私も不本意とする所であるが許して貰はねばならぬ。

(四) 參百七十頁の兩篇を終へて「結語」が與へらる、結論は必ずしも目下の著者の主目的ではない、僅か四頁を出でぬ。少し此點に考へてみたい。私の便宜の爲め三分する。(イ) マルサスは英國特有の功利主義とビュリタニズムの宗教的目的觀の生兒であるをみる

事。ボナーにも此の考方がある。次に(ロ)「自然的法則によつて社會に幾多の害惡が発生する——然ば此法則に對して人は全然手を拱いて無策なるべきか。否、人は先づ此法則の理解によりて害惡の幾分を除き去ることが出来る」。「人口法則に基く害惡の回避輕減は如何。——マルサスは個人に向つて道德的抑制の義務と必要とを唱道せんとする。されど——性慾の不變に依然たりたい調節し得るのみにして——なほ蔽ひ能ざる矛盾の存在を否定し去る事は不可能であつた。道德的抑制をすゝむるに當つて——狐疑逡巡終に懷疑的態度を脱し得ず——産兒制限に對しては彼の宗教的道德觀が何等の考慮を拂ふ價值をも與へなかつた」。前段はそのまゝにして後段に就いて言へばボナーが彼の第四篇の末尾に掲ぐるものと其の讀了後の印象が大に相違するは注目に値する。But all can enter into the mind of M. and understand his work, who know the harshness of the struggle between the fresh and

the spirit, and yet believe in the power of ideas to change the lives of men, and have faith not only in the rigour of natural laws, but in man's power to conquer nature by obeying her. 此の中には明に對立する二元がある。遂には調和すべき二元であるのか、調和せざる二元であるのか。本書に還つて(ハ)——功利主義に打ち通すべきベンタムの徹底さも、一つの原理を追求するリカルドの明快さも之をマルサス人口論に求むる事は不可能である。——多面なるべきマルサスが單純一面的に解されんとした。連々百年を経過して未だ盡き得る『マルサス論争』は少からず此マルサス解釋の責任である。私は立ち歸つてマルサスの全面をみつめんとした。——そこに『最も濫用されたる人』マルサスを見出した。ボナーの叙述は右で終るけれ共本書の著者にあつては、(ロ)は(ハ)へ連續する。「解釋は既に或程度に於て問題の批評である」限り第二篇は言はずもがな第一篇に於ては、鋭き著者の批判

が解釋や説明の到る所に閃く。そして此の批判の色彩の裡に著者の内部に宿る熾烈な意欲を看取し得るのである。かゝる意欲は結語の(一)に凝縮す。著者の意欲とは先づマルサスを嚴格に解するにある。嚴格に解するとは狭く解することに非ずして凡ゆる與件を配して其の相互關係に於て把握せんとするに外ならぬ。ステール夫人の「獨逸」の中に「 *Tout Comprendre, C'est tout pardonner*」の句があつた。著者の解せんとの努力は當然に容すの立場に移らんとの努力である。「*Allseitigkeit* に於てマルサスを捕ふるに其は *the best-abused man of the age* のぬれ衣を乾さんとするにあり *full-valued Coin* として眺めんとするに在る。否、著者の意欲はあまりに奔流する。「現下本邦の状態は十八世紀末葉の英國である。人口論史上最大の巨人トマス・ロバート・マルサスが最も注目を要求する時と所があるならば現下の日本は全く夫である」先きにボナーの一面を克服せられて、より正確なるマルサ

スを眺め得たる著者は、更に原形マルサスを何等かの點、何等かの形式に於て克服するの必要を感ぜざるや如何。之れ著者の今後の業作に待つて知る外はない——カウツキーの樂天的なる倫理一元觀は思ふに本著者の意思でなからう。ともあれ今回の *Leistung* のうちにはライトの引用したフックスレーの言葉に通づる志向がふくまれる。曰く *There is no alleviation to the sufferings of mankind except veracity of thought and of action, and the resolute facing of the world as it is when the garment of make-believe with which pious hands have hidden its uglier features has been stripped off.*」

顧るに著者のマルサス研究は決して短き過去よりの思付きではない。或は十年以前に根ざすのであらう。その洋行に際し先づ英國に遊ばれた。それから獨逸佛蘭西にも渡つたが單に息ヌキに止まる。留學前からの心願であつたと思へる二つの研究が常に、其の爲めに

都合よき英京の地に此人を吸引するのであつた。著者は研究項目を一度、確定すれば徹底目的までやりとげねば承知出来ぬ強き信念の士であるらしい。唯一點この強き信念を裏切つた事實があるけれども天機洩す可らず。かくて在歐三年に互り其勢力と Mehl を傾けて蒐集せられた多くの資料を以てこゝまで完成せられた跡をみて痛く私は喜ぶ。それと同時に、理論をやるの明快と、學說資料取扱上の落ちついた手ぎわが、なほ春秋に富む本書の著者伊藤教授にとつて尊重すべきものたるを指摘して拙き紹介の筆を擱かう。(四一七、夕)